地域の温かさを未来へつなぐ

子どもを取り巻く環境が変化する中、地域には、子どもの健やかな成長を願いながら活動を続ける人たちが、今なお存在していることが分かりました。
では、改めて「地域で子どもを育てる」ことに、どんな意義があるのでしょうか。
地域で子どもを支える循環を生み出していくために必要なことについて、宮城県東部教育事務所の小野寺かおり次長に話を聞きました。

Interview 専門家の声



小野寺 かおり 次長
宮城県東部教育事務所 教育学事班
社会教育主事

中田町出身。大学卒業後は登米市や石巻市を中心に、県東部エリアの中学校で保健体育の教諭として19年間勤務。現在は県東部教育事務所に在籍し、社会教育主事として３年目を迎える。教育現場での経験を生かし、地域の社会教育事業の企画・実施および専門的な助言と指導を通して、地域における人々の学びを支援している。

家庭が孤立しやすい時代 だからこそ、地域で子育てを

家庭の多忙化や孤立化が進み、子どもたちが多世代と関わる機会が減少するなど、家庭や学校だけでは解決が難しい課題が増えています。そんな時代だからこそ、地域で子どもを見守り支えることが課題解決の大きな糸口になります。

地域の中で温かく見守られて育った子どもたちは、「地域に大切にされている」「ここにいていいんだ」という安心感を得て、自信を持ってさまざまなことに挑戦できるようになります。また、地域で子どもを育てることは、関わる住民にとっても大きな意義があります。子どもたちの成長に触れ、感謝される経験は、大きな喜びや生きがいになりますし、子どもをきっかけに多世代間の絆が生まれることで、災害時などのいざというときに助け合える強固なまちづくりにもつながります。

登米市は、私自身も幼い頃から地域の人に見守られて育った場所であり、地域の温かさが今も根強く残るまちだと感じています。時代の変化に目を向けつつ、地域住民が子どもたちと自然な形で関わる文化を大切にしてほしいです。

子どもをパートナーと捉え「共に育つ」まちづくりへ

子どもたちとの関わりをより効果的なものにしていくためには、子どもを単に「支える対象」として見るのではなく、「一緒に地域をつくるパートナー」として捉え、企画などの段階から巻き込んでいくことが大切です。さらに、「登米市の子どもをどう育てたいか」という目標を地域と学校で共有し、話し合いながら取り組むことも重要です。なお、一部の人に負担が集中して活動の継続が困難にならないように、多くの人が無理なく参加できる工夫や、活動の様子や思いの可視化、感謝を伝え合う仕組みづくりが不可欠です。

子どもたちを支える活動は、ボランティアや団体への加入だけに限りません。市内の公民館やふれあいセンターでも、子どもが参加するさまざまな事業が実施されています。「学校での活動は少しハードルが高い」と感じる場合は、まずは身近な取り組みの場へと足を運び、子どもたちと顔見知りになることから始めてみましょう。そして、「できる人が、できる時に、できること」から取り組んでいくことこそが、市全体で子どもを育んでいく「温かな循環」を生み出すことにつながっていくはずです。

地域でもらった優しさを 次世代の「わ」へと循環させて

「ちょっと緊張するけど、分かりやすく教えられるように頑張ります」。夏休みの朝、プリント学習に励む小学生と、その隣に寄り添い、優しくサポートする中学生。かつて自分たちが学んだ学校で、今度は誰かを支える側に。そこには、優しさが巡りつながっていく地域の「わ」が確かにありました。

こうした「わ」の中で育った子どもたちは、進学や就職などで登米市を離れたとしても、地域で大切にされながら過ごした時間は、温かな思い出として子どもたちの中に残ります。そして、「自分も誰かの力になりたい」「次の世代にも地域の良さを伝えたい」という気持ちが育ち、優しさの循環となって受け継がれていくことでしょう。

地域には、今回紹介した以外にも、子どもの健やかな成長を見守り支える、さまざまな活動が存在しています。その取り組みの場へと足を運び、子どもたちと顔の見える関係になってみませんか。その小さな一歩が子どもたちの今を支え、いつか地域の未来を支える大きな力になるはずです――。



▲学校支援ボランティア＝北方小学校「夏休み学習教室」
地元中学生の有志が集まり、夏休みの小学生のプリント学習をサポートします。